

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレー半島の近代と錫

東條哲郎 (在マレーシア日本国大使館専門調査員)

マレー半島を代表する産品として中学・高校の教科書にも出てくる錫ですが、マレー半島の錫生産は近代世界の消費社会の発展の産物でした。近代、錫はブリキの原料として需要が増加しました。ブリキは鉄板に錫メッキを施したもので、錆びないという特性を持っており、缶詰や食器、おもちゃなどとして利用されてきました。食料を長期保存できるブリキ缶が広く知られるようになったのはアメリカ合衆国の南北戦争でした。南北戦争後、ブリキおよびブリキの缶詰はアメリカ社会に広まりました。その理由の一つは西部開拓です。未開の荒野を旅する開墾者たちにとり、保存食は不可欠であり、密閉により内容物が変質しないブリキ缶は、食料のみならず化粧品など生活のあらゆる場で使用されるようになりました。また、ブリキで作られた食器も開拓者に広く利用されていました。開拓時代のアメリカについて書いた「大草原の小さな家」、「トム・ソーヤの冒険」など多くの小説でも、ブリキの缶詰や食器は当時の生活を引き立てる重要な役割を果たしています。

19 世紀、ブリキの生産はイギリスが行っており、世界各地に輸出していました。これは、イギリスがいち早く産業革命を成功させ高い工業技術を有していたことに加え、イギリス・コーンウォール地方に世界有数の錫鉱脈が存在していたためです。しかし、急速な錫需要の増大にコーンウォール地方からの錫供給が間に合わなくなり、新たな産地としてマレー半島が着目されました。

日本語で鉱山という単語によるイメージは、佐渡金山や石見银山などに代表されるように、山の中を掘り進んでいくというものですが、マレー半島の錫採掘は露天掘りで行われていました。錫鉱脈はマレー半島のペラやスランゴールに集中していましたが、錫鉱床の経営や労働者として、19 世紀後半以降中国南部から多くの華人が移住しました。

マレー半島の錫鉱床が半島西海岸に集中していたことは、その後のマレーシアの経済発展にも大きな影響を与えました。クアラルンプールやイポーなど現在のマレーシアを代表する都市の多くは、錫採掘を中心とする鉱業都市が基礎となっています。マレー半島には、錫輸出やマレー半島各地に移住する移民や、彼らの消費する食料や衣料、その他の品々の受け入れ口としてクラン港やポート・ディクソンなどの港が発達しました。そしてマレー半島各地の港と世界を結ぶ拠点とし

てシンガポールやペナンが国際港として発展しました。



マレー半島における錫採掘の様子 (2005 年ペラ州にて、筆者撮影)

これらの鉱業都市から港までを結ぶ形で鉄道・道路・電信網が整備され、20 世紀に入りゴム生産が活発化すると、これらの鉄道・道路網を生かしてゴム農園が形成され、労働者として、インド亜大陸やジャワからの移民が増加しました。現在のマレーシアの人口構成で、マレー半島西部のスランゴールやペラに華人やインド人が多いのは、この当時に移民してきた人々がその後もこの地域に住み続けたからです。また、都市の発展や港湾・輸送、電信など各種インフラ整備は、マレーシアが独立後、工業化を進めていく上でも重要な要因となりました。

マレー半島における錫生産は 1980 年代後半の錫価格下落により採算がとれなくなり、ほぼ全て中止されました。その後も小規模な採掘は続いているようですが、現在ではマレーシアを代表するおみやげとして知られるコンピューターの製造に必要な錫も輸入に頼る状況となっています。

なお、本原稿の内容は筆者の所属組織の見解を代表するものではなく、個人的な見解に基づくものです。

< 筆者紹介 > 1979 年東京都生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得退学。文学博士。2004 年から 2006 年までマラヤ大学歴史学科に留学。2009 年より在マレーシア日本国大使館に専門調査員として勤務する傍ら、マレーシアの歴史や社会について研究。専門はマレーシア近代史(錫鉱業史)。この記事への問い合わせは、tetsuotojoj@ yahoo.co.jp まで。